

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル:「近世南アジアの文化と社会:文学・宗教テキストの通言語的比較分析」(平成30年度第1回研究会、10月6日は、Workshop: Indic Texts and Islamicate Culture from the Ghaznavid to the Sultanate Periods として、ペルソ・インディカ、研究グループ「南アジアにおける文化的接触のダイナミズム」との共催)

日時:平成30年10月6日(土曜日)午後1時30分より午後5時30分

平成30年10月7日(日曜日)午後1時30分より午後5時

場所:東京外国語大学本郷サテライト5階セミナールーム

10月6日

1. Noémie Verdon (Swiss National Science Foundation) “Al-Bīrūnī’s Kitāb Pātāṅgal and Kitāb Sānk: Methods and Strategies of Translation.”

Verdon 報告は、ガズナ朝時代に活躍したムスリム知識人、アブー・ライハーン・アル=ビールニー(1050年以降没)のサーンキヤ・ヨーガ哲学理解を取り上げたものだった。ビールニーが著したとされる『サーンキヤの書 Kitāb Sānk』は原典が散逸しており、その内容については『インド誌 Taḥqīq mā li-l-Hind』に含まれている断片的な記述から推測するしかない。いっぽう『パタンジャリの書 Kitāb Pātāṅgal』については、写本が一点のみ伝世し、ヘルムート・リッターによって1956年に校訂された。

ビールニーはサーンキヤ・ヨーガ哲学の重要タームをアラビア語の哲学用語に置き換えている。しかし純粋精神プルシャが「魂・自己」を意味するナフス、根本物質プラクリティが「質料」を意味するハユラー(ギリシア語のヒューレーからの借用)に置き換えられているなど、用語の置き換えは必ずしも体系だったものではなかった。ビールニーはサーンキヤ哲学をナフスとハユラーの二元論とは理解しておらず、これはビールニーが参照したソースに欠落があったことを示唆している。また、ビールニーはギリシア哲学との比較からサーンキヤ・ヨーガ哲学をとらえている。例えばサーンキヤ哲学の「未顕現(アヴィヤクタ)」は「可能態(ビル=クーワ)」、「顕現(ヴィヤクタ)」は「現実態(ビル=フィウル)」に相当するものとして理解された。

(文責:小倉智史)

2. Satoshi OGURA (ILCAA) “Revisiting Sanskrit Epic-Purāṇic Elements in Rashīd al-Dīn’s History of India.”

小倉報告は、14世紀初頭にイルハン朝の都タブリーズで編纂されたペルシア語世界史のインド史の章に含まれる、サンスクリット叙事詩・プラーナの要素を検討したものだった。はじめに二つの史書の編者であったカーシャーニーとラシードにインドの情報を提供した

カシミール出身の仏僧、カマラシュリーの活動を再検討し、上座仏教の特に説一切有部に属していた可能性が高いこと、イルハン朝の宮廷を訪れる前に、大元ウルス領域で活動していた期間があることが確認された。

カーシャーニーの『歴史精髓』とラシード『集史』それぞれのインド史では、ビールーニーの『インド誌』に基づいて四つのユガの概念が説明され、それぞれのユガに活躍した諸王たちの歴史として、カシュヤパ・プラジャーパティとアディティの子孫、イクシュヴァーク王家の系譜が語られる。ここでは『マールカンデーヤ・プラーナ』、カーリダーサの『ラグヴァンシャ』、『ラーマヤナ』などに基づいている可能性が高い。またドヴァーパラ・ユガの出来事については、カーシャーニー、ラシードともに『マハーバーラタ』の存在に言及しており、その編者とされるヴィヤーサを預言者の一人に数えている。

質疑応答では、仏僧であったカマラシュリーがこのようなサンスクリット叙事詩・プラーナの知識を獲得しえた歴史的背景について、様々な議論が交わされた。

(文責：小倉智史)

3. Fabrizio Speziale (School for Advanced Studies in the Social Sciences, Center for South Asian Studies, Paris) “*Šihāb al-Dīn Nāgawī’s Šifā al-marāz: Reconsidering Greco-Arabic and Ayurvedic Theories of the Humours in 14th century India.*”

Speziale 報告は、14 世紀後半に北インドで活躍したムスリムの医者、シハーブッディーン・ナーガウリーが 1388 年に著した医学書『病の治癒』を取り上げて、その中でアーユルヴェーダのトリドーシャ概念がどのように理解されているかを論じたものだった。イスラーム世界ではラズィーやイブン・スィーナの著作によってガレノス由来の四体液説が広く浸透したが、ナーガウリーはアーユルヴェーダの「ドーシャ」をアラビア語の「体液 (ヒルト)」に翻訳している。そしてそれぞれヴァータは「風 (バード)」, カパは「粘液 (バルガム)」, ピッタは「胆汁 (サフラー/タルハ)」となり、風は冷と乾、粘液は冷と湿、胆汁は熱と乾/湿の性質を有している。ガレノスの四体液説では、胆汁には黒胆汁と黄胆汁の 2 種類があるとされるが、いずれもピッタに対応するものとして統合されている。また、四体液のうち血液はいずれにも対応していない。

ナーガウリーが論じたトリドーシャと四体液の対応関係は、後の時代のムスリム知識人にも受け入れられており、例えばデカンのアーディル・シャーヒー朝に仕えたイラン出身の歴史家フィリタは、自身の著作『医者たちの教訓』で類似する議論を展開している。ムスリム知識人の間でそのようなトリドーシャと四体液を対応させる理解は 18 世紀まで続いた。

(文責：小倉智史)

4. Kazuyo SASAKI (ILCAA Joint Researcher, Hokkaido Musashi Women’s College) “*Ways for liberation: The early textual transmission of Indian traditional science in Persian works.*”

榊報告は、報告者が近年取り組んでいるアラビア語・ペルシア語文献に記録されたサンス

クリット文化由来の占星術・予兆学に関する記述をみつかったものだった。そのような学問はヴァラーハミヒラの『占星術大集成』でも取り上げられているが、フィールーズ・シャーの命令で同書を翻訳したアブドゥルアズィーズ・シャムセ・バハー・ヌーリーは、これらの学問に関する部分を見捨てている。いっぽう近年 Carl Ernst が取り組んでいるアラビア語・ペルシア語のヨーガ文献群、そしてその典拠と想定されている『甘露の水瓶（アムリタクンダ）』について、報告者は息（スヴァラ）の学を扱った作品である、サティエーンドラ・ミシュラの『ナラパティジャヤチャリヤー』に対応する記述があることを突き止め、これがアラビア語・ペルシア語に翻訳され、一つの学問分野を確立させたとした。

（文責：小倉智史）

5. General Comments by Michio YANO (Kyoto Sangyo University)

4人の報告の後、コメンテーターの矢野道雄氏から、各報告者に対して報告で依拠したテキストの版や、同一の起点テキストから複数の翻訳が作成された場合の訳語の差異、各テキストの著者周辺の知的環境などについての質問が寄せられた。各報告者が矢野氏の質問に回答をしたのち、全体の議論へと移行し、終了時刻まで盛んな議論が参加者の間で交わされた。

（文責：小倉智史）

10月7日

1. 三田昌彦（AA 研共同研究員、名古屋大学）「15-17 世紀ラージャスターンの銅板施与勅書の様式と語法：中世初期からの転換」

銅板施与勅書（Skt.: *tāmra-śāsana*, *tāmra-patra*. Rāj.: *tāmbā-patra*(*patar*)) はバラモンや寺院に村落や免税地などを永代に施与（寄進）する際に受領者に与えられる特許状であり、もっぱら王に発給権があるとされる勅書である。ラージャスターンではこの銅板施与勅書が 14 世紀前半を境にサンスクリット語からラージャスターニー語に、徐々にではなく急激に変わり、その様式（いかなる項目をいかなる順序で記すか）も語法（いかなる表現を使用するか）も大きく変化した。今回の報告では主に 15-17 世紀のラージャスターン各地の銅板施与勅書の様式と語法の特徴を大まかにつかみ、報告者がこれまで考察してきた中世初期のそれらと比較してみた。

15-17 世紀の銅板施与勅書は中世初期のもの比べると非常に小さく薄い銅板（あるいは青銅か？）に刻まれ、文字数も激減する。サンスクリット勅書 1 件を除き、すべてラージャスターニー語の文書である。構成は神々を讃える短い言葉と発給者の承認のサイン（*sahī*）などからなる緒言のあと、施与の内容を記す散文の主文が記され、訓戒的慣用句（韻文）、伝達官、作成者、年月日となっており、必要最小限の極めてコンパクトな内容である。この様式はメーワールでは 15 世紀末、マールワールでは 16 世紀末には概ね固まる。

語法に関しては、ラージャスターニー語の文書であるにも拘わらずサンスクリット的な

あるいは疑似サンスクリット的な用法が目立つ。主文冒頭では *ādeśātu*、*vacanātu*（「～の命令によって」）と、サンスクリットの *Abrative* が使われる（おそらく *Lekhapaddhati* などに見られるサンスクリット行政文書の告知表現から来たものであろう）。通常サンスクリット古典からの引用であるはずの訓戒的慣用句 (*śloka*) は、なぜかそのまま引用せず極めて崩れた疑似サンスクリットの表現となっている。また、主文において贈与先を示す「～に」を意味する表現として後置詞的な *kasya*（サンスクリットの *Genitive*）が使われている。なお、前述の訓戒的慣用句には中世初期には見られなかった「ヒンドゥーには牛の罪を、ムスリムには豚の罪を」といった表現が 14 世紀末には現れる。

以上のように、15 世紀以降の銅板勅書は中世初期の長大なサンスクリット勅書と比較すると内容のコンパクトさ、様式、使用言語、語法など大きく変化するが、国家システムと関わる点としてさらに指摘すれば、まず様式の問題として発給者の王統譜・プラシャスティが全く記されなくなった点が挙げられる。この時代、サンスクリット語のプラシャスティは王家の寺院に石碑として刻まれ、また 17 世紀にはマールワリー語、ブラジュ語などで各王家が年代記を編纂しており、銅板勅書はもはや王統譜の媒体ではなくなっていたと言えよう。また施与地・施与村の四境が記されないのがこの時代の施与勅書の特徴だが、それはおそらく、17 世紀には行われていた検地によって各村の耕地が登録されていることと無関係ではなく、当時の徴税行政といかに関係していたか検討する必要がある。施与関係者については、土地・村落の受領者に中世初期の文書には現れない *cāraṇ*（宮廷詩人）が目立つ点の特筆すべきであろう。また王の代理の施主として施与式を現地で執行する伝達官は中世初期には外交官 (*ākṣapaṭalika*) や王太子 (*yuvarāja*) などと極めて重要な任務であったが、この時代の伝達官は *pañcolī*（カーヤスタ）や商人などになっており、さして重要な任務ではなくなっているように思われる。上記四境の問題とともに、施与プロセス自体が中世初期とは異なってきている可能性がある。

最後に中世初期の勅書との大きな違いとして、王と従属勢力（王の同族、家臣、従属王権）との関係を指摘しておく必要がある。中世初期には王と従属勢力との間で勅書発給をめぐる明らかに緊張関係があったことが勅書の記述のあり方から明確に見えてくるが、この時代の勅書ではそれが全く表れなくなっている。他の状況（銅板の縮小と文字数の激減、王統譜の消滅など）と考え合わせると、銅板勅書が領地に対する王権の行使、領有権の主張の手段としては、中世初期ほど重要ではなくなっているということではなかろうか。

（文責：三田昌彦）

2. 長崎広子（AA 研共同研究員、大阪大学）「15-6 世紀のヒンディー・バクティ文学の思想と時代」

古ヒンディー文学には、ブラジ・バーシャー文学を中心として西のラージャスターニー文学、東のアワディー文学がある。15-6 世紀は北インドでムガル帝国がヒンドゥー諸王と抗争を繰り返してその勢力が拡大した時代で、歴史研究は盛んにおこなわれている。では、古

ヒンディー文学作品をとおしてその時代を知ることは可能であろうか。ラージャスターニー文学では『プリトゥヴィーラージ・ラーソー』(13-6 c.)のように歴史上の人物と出来事が描かれた作品はあるが、史実とは異なる展開の文学的脚色が施されている。なお、同様の現象はアワディー語のスーフィー文学を代表するジャーエスィー著『パドマーワト』でもみられる。

15-6 世紀のヒンディー文学の主流は、北インドを席卷したバクティの思想を描いたバクティ文学であった。クリシュナ生誕のブラジ地方を中心としたブラジ・バーシャーによるクリシュナ信仰文学、ラーマ生誕のアヨーディヤーを中心としたアワディー語によるラーマ信仰文学、さらにニルグナ文学があるが、スーフィー文学をニルグナ文学に含める説もある。スールダース、ミーラーバーイー、トゥルシーダース、カビールは、当時のヒンディー・バクティ文学を代表する詩人で、作品が流布するにつれて、彼らの生涯の奇跡譚を描いた聖者伝文学が彼らのカリスマ性を強調するようになる。ラーマーナンド派の聖者伝文学『信徒列伝』(1600年頃)の著者ナーバーダースは詩人たちの神聖さを簡潔に六行詩で記したが、その注釈を約100年後に著したプリヤードダースは、詩人たちと時の権力者たちとの面会場面を描き、詩人たちが当時のムガル皇帝に匹敵するカリスマを有していたとする。これらの逸話は、ヴァースと呼ばれる語り部たちが民衆に語り聞かせていた伝承を集めたものとみられ、この点からバラモンやムガル皇帝を悪とする勧善懲悪の物語が1700年代には民衆に流布していたと考えられる。

詩人たちの帰属する宗派には教義上の違いがあり、これまでのヒンディー文学研究では、先述のような文学史上の分類に詩人や作品をあてはめ、宗派や文学ジャンルに基づいて文体や文学様式が個別に論じられることが多い。だが、クリシュナ信仰のスールダースはラーマーヤナを描き、ラーマ信仰のトゥルシーダースはクリシュナ信仰を描き、クリシュナ信仰のミーラーバーイーとニルグナ信仰のカビールには信仰を商品売買に喩えるなど作品間の共通点がある。たとえばスールダースがクリシュナ信仰の詩集『スールサーガル』のなかでラーマーヤナを題材にいくつかの詩を著したのは、ラーマとクリシュナがともにヴィシュヌの化身であったことだけが理由とは考えられない。あえてラーマ神を描くことで自らの信奉する神クリシュナの優位性を強調した、あるいは他宗派への配慮など、いくつかの解釈の可能性がある。宗派やジャンルを超えた文学描写の共通性は今後取り組むべき研究課題となろう。

研究会での討論をふまえた結論として、文学をとおしてその時代を知ることはある程度可能であると考え。さらに文学における史実や歴史といった問題に話題を広げるなら、ラーソー文学の Cynthia Talbot 等の最新の研究動向にみられるような、作品の描写に投影された歴史表象の解明に今後の文学研究の新たな可能性が見いだされるだろう。

(文責：長崎広子)